

学生と教員の信頼関係に基づく授業改善の取り組み

帝京大学

学生の視点に立ったFDに取り組む帝京大学は、トレーニングを行った学生が授業に参加し、観察結果を教員に報告する活動を開始。教員からは、自身では気づかなかった見地から授業を改善できると好評で、利用が進んでいる。学生にとっても、大学や教員に対する理解が深まる相乗効果が生まれている。

学生主体のFDという先鋭的な試み

FD組織である高等教育開発センターが実施している授業改善活動は、SCOT (Students Consulting on Teaching) と呼ばれる。一定のトレーニングを受け、選ばれた学生が、教員の希望に応じて授業を観察。時間の使い方、教員の移動範囲、板書の内容などを記録する。教員は、学生のレポートや面談による報告を受け、授業の内容や手法を見直す。

「教員のために教員が行う活動」になりがちであったFDを、「学生のために学生の視点から行う活動」と捉え直した点に特徴がある。アメリカ・ユタ州のユタバレー大学、ブリガムヤング大学で実施されている活動を、土持ゲーリー法一センター長が2011年度から取り入れたものであり、大学によると、日本では初の試みだという。

2013年度は、正規の活動を行うSCOT学生である「シニア」が計6人、トレーニング中の学生である「トレーニー」が9人となっている。

制度を利用する教員は年々増えている。2013年度は提供可能な枠を上回

る利用希望者があり、一部の申し込みを断ったうえで、12人が利用した。

学内意識の変化を期待し学長が導入を即決

アメリカのFD担当者の全国組織であるPODネットワークの年次大会が2010年11月に開催され、ユタバレー大学はSCOTのロールプレイを実演した。学生が教員にコンサルティングを行う光景を見た土持センター長は、大変な衝撃を受けたという。学習者中心のシラバス作成など、学生を主役に据えた教育改革に取り組んできた土持センター長は帰国後、沖永佳史学長に報告。学長から、その場で「ぜひ導入してほしい」との依頼があった。

「大学は本来、学習者主体の学びの場であるべきだ。学生と教員が、主体的な学びの重要性を認識するには、授業を含めた両者のコミュニケーションのあり方を変える必要がある。授業改善に学生が参加することによって、教員の学生観、学生の教員観に変化が起きることを期待した」と、沖永学長は導入を即断した理由を語る。

2011年2月、土持センター長と同セ

ンターの井上史子准教授がユタバレー大学を訪れて運営方法を視察。同年秋に、2人が受け持つ授業の履修者の中から学生をスカウトし、トレーニングを始動した。

アメリカの実践例を日本流にアレンジ

学生のトレーニング期間は10月から翌年3月までの約6か月。主に高等教育、授業運営、コミュニケーションをテーマとしている(図表)。センターが実施している教員向けのFD研修を再構成したもので、ほぼ同レベルの専門性を有している。

運営は、ユタバレー大学の事例を参考に、学生がほぼ自主的に活動している点に倣い、トレーニングの講師役を



SCOT学生の指導によりトレーニングを行う様子

徐々にSCOTの先輩学生に委ねる。2013年度はメニューの約半分を学生が指導した。コミュニケーションを活性化させるため、活動時に軽食を提供する方式も採用し、効果を上げている。

一方、日本の教育環境をふまえ、独自のしくみもつくった。「アメリカに比べると、学生の態度や言葉遣いに対する教員の期待度が高い」(井上准教授)。初めて教員に対応するときから適切な振る舞いができるように、活動前の準備段階の「トレーニー」レベル、有志教員の協力を得て授業観察体験を行う「インターンシップ」を設けた。

「トレーニー」から「シニア」になるための審査に合格できた学生の割合は、過去の実績でおおよそ半数。スカウト以外に公募によって学生を集めた場合は、1人も合格者が出なかった。質の高い学生をどのようにして集めるかが大きな課題である。

教員との対話は全て学生に任せる

教員はSCOTを利用する際、自身の授業のどの部分を観察してほしいのかを、あらかじめSCOT学生に伝える。

依頼内容として多いのは、大規模授業に関するものだ。教室後方の学生の授業態度や、多数の学生とのコミュニケーションの取り方などが観察対象となる。また、講義形式の授業にグループディスカッションを導入するといった、新たな教授法を試みときの学生の様子についても依頼が多い。

担当するSCOT学生は、当該授業を履修登録していない者の中から人選される。履修者に混じって授業を受け、教員と学生の行動、様子を客観的に記録し、後日、A4判用紙で6~10枚程度のレポートを提出。希望する教員には事後面談の場を設け、詳細な報告を行う。感想を述べたりアイデアを提供したりすることはあるが、評価や改善点の指摘は禁じられている。「学生に課題を課して考えさせるような場がない」「学生に背を向けて話している時間が多い」といったように、あくまで教員に自己省察を促すのが狙いだ。

活動の過程では、教員との信頼関係を築くために守秘義務が徹底されている。提出前のレポートを井上准教授が確認する以外、基本的に当事者同士の1対1のやりとりである。「報告内容が何に使われているのか教員に不信感を

抱かれると、活動として成り立たない。全てを学生に任せるしくみだからこそ、厳しいトレーニングや選抜を課したうえで、学生を信頼する必要がある」と井上准教授は語る。

今後の教育改革を牽引する存在に

利用した教員は、「学生にこれだけの観察力があるとは思わなかった」「想像以上に報告が的確で、信頼感が持てた」といった感想を述べている。SCOTの活動方針上、授業改善の具体的な内容をセンターが把握することはできないが、FD研修会で教員が行った報告からは、授業中に学生の意欲が向上する場面、集中力が欠ける場面などを把握し、教授法を見直している様子がうかがえたという。

SCOT学生にも、多くの気づきもたらされている。3年間活動に関わった長沼陽子さん(外国語学部4年生)は、「これまで思い至らなかった、教員の授業に対する意図や思い、どのような狙いで授業を設計し、どのような制限があるかなどを知ることができた。学生は、大学での学びを教職員に依存せず、自分自身のこととして責任を持つべきだと感じた」と話す。

センターは、学生の主体的な授業参加を進める方針を明確にするため、2013年度に「POSE (Promotion Of Student Engagement)」という標語を掲げた。SCOTを通して気づきを得た学生がリーダーとなり、教職員を含む大学全体に、授業に真剣に臨む姿勢が広がることを望んでいる。

「学長の理解もあり、学生が教育改革をリードするという考え方が、徐々に教職員に浸透し始めている。SCOTは、この考え方の中心を担う存在になるはずだ」と、土持センター長は今後の活動への確かな手ごたえを語った。

	テーマ	内容
1	オリエンテーション	●SCOTとは ●トレーニング受講のために ●SCOTポートフォリオの説明
2	高等教育について知る①	●日本の高等教育制度 ●先輩SCOTに学ぶ(帝京大学での学び)
3	高等教育について知る②	●世界と日本の高等教育の動向 ●能動的な学びとは(アクティブラーニング)
4	大学授業について知る	●学習者中心のシラバスとは ●観点別到達目標と授業設計
5	コミュニケーショントレーニング①	情報を読み取り、まとめる力 ●フォトランゲージ ●授業観察レポートの書き方
6	コミュニケーショントレーニング②	柔軟に対応する力 ●ロールプレイ
7	調査・研究発表・総括	グループで選択したテーマについて、調査・研究、発表、意見交換まで学生主体で行う。また、トレーニング総括も行う。

※トレーニング期間中にインターンシップを行う。